

〔愚管抄^七〕僧中には、山^〇層^〇寺には青蓮院座主の後はいさ、かもにあふべき人なし、うせて後六十年におほくあまりぬ、寺^〇城^〇寺には行慶、覺忠の後、又つやくと聞えず、東寺と御室には五の宮まで也、東寺長者の中には、寛助、寛信など云人こそ聞へけれ、さがりざまには理性三密などは名譽有けり。

〔十訓抄^{十一}〕八幡の樂人元正、當宮領備中國吉河保^{二條御}に下向して上洛の間、檉生の泊にて心神違亂如亡、片鬢雪のごとく變奇異の思をなして、巫女に占ふ所に、吉備宮託宣し給て云、適當國に下向、其曲をきかざるに、よて祟りをなす所也、忽に押歸て彼社に參て、皇帝以下の秘曲を吹間白髮忽にもとのごとし、尤道の眉目といふべし。

〔増鏡^{おどろ}の下〕又清撰の御うたあはせとて、かぎりなくみが、せ給ひしも、みなせどのにての事なりしにや、たうぎに衆儀はんれば、人々の心ちいと、おき所なかりけんかし、建保二年九月のころ、すぐれたるかぎりぬきいで給ふめりしかば、いづれかおろかならん、中にもいみじかりし事は、第七番に左院の御うた、

あかしがた浦路はれ行あさなぎに霧にこぎ入あまのつり舟

とありしに、きたおもての中に藤原のひでよしとて、としごろもこのみちにゆり、すきものなれば、めしくはへらる、事常のことなれど、やむことなき人々の歌だにも、あるは一首、二首、三首にはすぎざりしに、この秀能九首までめさせて、まかも院の御かたてにまゐれり、さてありつるあまのつり舟の御歌の右に、

契をきし山の木の葉の下もみちそめしころもに秋風ぞふく

とよめりしは、その身のうへにとりて、ながき世のめいぼく何にかはあらむ、

〔塵塚物語〕常徳院殿依御秀歌炎天曇事